

グッドプラクティショナー 紹介

推薦文

修復的対話フォーラムさんを
グッドプラクティショナーに推薦する理由

修復的対話フォーラムは山下英三郎先生が開
始された活動ですが山下先生がコスモス村に活
動の場を移され、今は前田さんたち比較的若い
スクールソーシャルワーカー（以下、SSW）
が中心に活動しています。修復的対話フォー
ラムでは、学校に修復的対話の場を作る地道な活
動を勤務の傍ら黙々と続け、近年対話サークル
を実践してほしいという学校からの依頼が増え
ています。これまでの活動成果が実りつつある
と言えます。しかし平日勤務があるSSWが、
やはり平日に開催してほしい学校からの依頼に
応じるにはより多くの対話が担える協力者が必
要です。またSSWが不登校など事後対応のミ

クロ実践にとどまらず、マクロ実践すなわち偏
見や差別、学校という組織や文化がもつヒエラ
ルヒーやパワーを背景とした学校環境がもつ構
造的暴力に取り組むことはソーシャルアクショ
ンとして重要な活動です。そのような理由から
推薦しました。

より多くのソーシャルワーカーが、お互いを
尊重するために、「自分は何を大切にしている
のか？」と信念を問い、お互いの多様性を体感
し「社会正義とは何か？」を個々の体験から問
い考える修復的対話サークルを担えるようにな
り、普及に弾みをつけてほしいものです。

（推薦者：埼玉県立大学教授 梅崎 薫）

〈グッドプラクティショナーについて〉

1 背景と目的

- ・よりよい実践を発掘・評価し、広く伝えることによ
り、よりよい実践が拡大することを目指す。
- ・よりよい実践を行っているソーシャルワーカーの仕事
ぶりを紹介することによって、よりよい実践とは何
か、よりよい実践のためには何かが必要か、などにつ
いて読者に考えていただく契機を提供する。
- ・これにより、ソーシャルワーク学会として、理論の発
展だけでなく実践の向上を、また、理論と実践の往復
運動の促進を目指す。

2 方法

- ・推薦者から候補者名をあげていただき、その推薦理由
（200～400字程度）を書いていただく。合わせて、
候補者に執筆の承諾をとっていただく。
- ・候補者は学会員以外でも可能。執筆内容は「実践内
容」。
- ・承諾を得られた候補者には、編集委員会から「私の実
践：ー」といったタイトルで、実践内容を紹介して
いただくように依頼する（3,200字程度）。

私の実践

学校に対話文化を定着させるために

—学校でのRJサークルを通して—

前田奈緒 (NPO 法人修復的対話フォーラム代表)

1. 学校での修復的対話サークル

私はスクールソーシャルワーカー（以下、SSW）で、NPO 法人修復的対話フォーラムの代表も務めています。SSW として学校に出入りし子どもたちと関わる中で、子どもが思いを率直に語れる機会、そしてそれにじっくりと耳を傾けてもらえる機会が少ないことを感じていました。

思い返せば自分の子ども時代にも、誰かが発言したときに、その意見をからかうような発言をする人がいる場面も見ていましたし、最終的には声の大きい人の意見が通るような経験を通して、私自身が段々と人前で意見を言うことは控えて目立たずにやり過ごす日々を送っていたように思います。語りたのに安心して語れない、学校でも、社会の中でも、そんな思いや経験をしたことのある方は少なくないのではないでしょうか。

今、修復的対話フォーラム（以下、当フォーラム）の活動で、学校の中で対話の場をつくっていると、子どもたちからこんな声が聞こえてきます。“本当に自由に話していい？”私が“いいんだよ”と応じた時のパッと明るくなった表情が忘れられません。学校という場自体が安心できない子どももいます。自分の思いを語りたくない子どももいるかもしれません。私たちは、そんな気持ちにも心を寄せつつ、子どもたちが語りたと思った時に語れる場があるように、学校という場のなかに、対話の場をつくる実践を続けています。

2. 今、学校のなかで起きていること

「いじめ防止対策推進法」の成立により、学校では様々ないじめ対策を進めることが法的にも位置付けられました。

しかし、いじめの認知件数は年々増加している状態であり、深刻ないじめ被害も後を断ちません。それら原因の一つには、いじめの予防に先立つ子ども同士の相互理解や関係構築ができていないことと、子どもが主体的に問題解決に関与できていないことも影響していると思っています。

学校に出入りしていると、よく「謝罪の会」という言葉を耳にします。トラブルの後に、加害者が被害者に謝ることを前提にされた会の開催です。このような会に対して、私は疑問を感じています。謝ること、許すことは、他者から強いられるべきではないと思いますし、謝ったからと言ってそれが本心でないならば、逆にお互いにしこりが残るのではないかと思います。

学習指導要領では「主体的・対話的で深い学び」が示されていますが、授業内容に関することに限定されてしまい、子ども同士が安心して自分の気持ちを語り、価値をすり合わせ、それを理解していく機会は設けられているとは言えません。

SSW もいじめ対策には位置付けられているものの、現実には結果としての不登校対応などの事後対処に関与することが中心となっています。本来はソーシャルワークの専門性を活かし、子どもたちと共に学校の中に多様性の理解を生み出す働

きかけや、お互いが支え合う共生社会の実現へ向けた実践も必要だと考えています。

3. 修復的対話 (RJ) とは

修復的対話は、刑事司法の分野で開始されたものですが、起源は古く、世界各地の共同体で互いの関係性を保つために用いられていた取り組みです。基本価値を『人間尊重』におき、犯罪や事件などに関わる当事者だけでなく関係者も参加する対話を通して、傷や損害を確認し、責任や義務を全員で明らかにして、今後の展望を模索します。関係修復や回復に力点が置かれる未来志向が特徴です。

対話の場には4つのルールがあり、①お互いを尊重する、②相手の話をよく聞く、③相手を非難しない、④発言したくない時は発言しなくてもよい、を守りながら対話を進めていきます。

修復的対話には大きく2つの様態があり、被害-加害の関係が明確で対立が深刻な場合のコンファレンスと、他者理解や信頼関係を醸成し創り出す RJ サークルです。コンファレンスは対立が生じているため対話に至るまでの事前準備が大変であることと、ファシリテーターの力量も問われます。しかし RJ サークルは平時の状態で行うことができ、キーパーも難易度は高くありません。私たちは対立が生じてからの対話よりも日常的で予防的な対話の場を、学校という場に導入することの方が意義あると考え、RJ サークルを実践しています。

4. 学校での RJ サークル実践

それでは学校での RJ サークル実践について簡単に説明します。

学校から RJ サークルの依頼をいただいたら、なぜ RJ サークルを取り入れたいのか趣旨を伺い、状況や年齢に応じたテーマ設定を行います。学年に関係なく 1 サークルは 10 名以下に抑えた方が子どもたちは話しやすいようです。

RJ サークルを単発で終わらせないために教員

の理解は必要不可欠なので、事前に教員研修の時間を設けて教員に RJ サークルを体験してもらいます。その上で、子どもたちとの対話に参加する際のあり方や授業に立ち会う際の注意事項を説明します。

RJ サークルは道徳や総合学習の時間に実施することが多く 40 分程度で取り組めるプログラムを準備しています。当フォーラムでは以下のように実施することが多いです。①全員が輪になって座る②オープニング (チェックイン) ③センターピースの設置、④対話のルール説明、⑤トーキングピースの説明、⑥テーマに基づく対話、⑦クロージング、です。オープニングやクロージングは日常的な会話場面から離れることと同時に心理的安全性を高めるために、音楽を聴いたり詩を朗読しています。トーキングピースは持っている人だけが話をできる権利を保障するものであり、人形や鉱石等を用います。テーマに基づく対話では趣旨や学年や時期によっても異なりますが、子どもたちが話しやすいテーマを設定します。例えば「自分の気持ち」「将来について」「尊重について」などです。

実施後に子どもたちや教員にはアンケートの協力をお願いしており、都内中学校でのアンケート結果では、RJ サークルの参加が楽しかったかに対して「とても」「まあまあ」と答えてくれたのが 95.3%、また参加したいかに対しては、同じく 89.5% という回答を頂きました。

5. これから、私たちが大切にしたいこと

学校で RJ サークルをしていると、学校コミュニティの中にある「ルール」や「正しさ」、また集団の中で、個人の気持ちが抑圧されていると感じることがあります。他者の気持ちを大切に扱うことも大事ですが、同様に自分の気持ちも大切に扱うことを、私も対話の中で子どもたちと一緒に体感しています。

RJ サークルでは自分の気持ちに触れると共に、他者の思いにも触れるので、多様な考え方があることを自然と知っていきます。子どもたちは「自

分の話ができてよかった」と同時に、「他の人の話が聞いてよかった」「みんながこんなこと考えてたなんて知らなかった」との感想をくれます。自分の考えだけが唯一のものでなく、多様な考え方があることを対話から体感してくれているのではないかと考えています。

このように学校に対話文化が定着すれば、違いがあっても共存できる方法を子どもたちが一緒に考えられるようになり、多数決ではなく少数の意見にも耳を傾け合う、子どもたちも参画できる学校づくりが可能になると思います。

コロナ禍の学校では時間に追われ、先日実施した教員研修では、「久しぶりに先生達とゆっくり話せた気がする」という声が聞かれました。教員

同士の対話も、学校で対話の文化を醸成するために必要なのではないかと最近考えています。大人がまず繋がり合い、相互の価値観を受け止め合えること。子どもたちに求める前に、大人がまずそんな姿勢を見せたいと思います。

ソーシャルワーカーとして、子どもたちが過ごす学校環境への働きかけ、RJサークルを通じた対話文化の醸成を今後も続けていきたいと考えています。RJサークルに興味を持たれた方は、定例勉強会を月に1度行っていますので、ぜひ当フォーラム Facebook ページからご連絡ください。一緒に対話に取り組む仲間になっていただけたら嬉しいです。